

---

# ほととぎす会

伊織 ひなた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ほととぎす会

### 【Nコード】

N6745T

### 【作者名】

伊織 ひなた

### 【あらすじ】

私立千石高等学校。

この高校の生徒会は、少し変わっている。

千石高校の“千石”が“戦国”と同じ響きなことから、メンバーは、たったの3人で、信長、秀吉、家康という、戦国時代を代表する武将の名前と呼ばれている。

通称、ほととぎす会。

高校2年の5月、千石高校へと転入することになった友江千歳ともえちとせは、二人の不思議な青年、楓かえでと柊くぬぎに出会う。

二人との出会いをきっかけに、千歳の毎日は、非現実的なものへと変わっていく…。

はじまり。

私立千石高等学校。  
しりつせんごくこうとうがっこう

校門横に掲げられた、学校名がでかどかどと書かれた銀の石板を、友  
とも  
江千歳は、ぼんやりと眺めていた。  
もえちとせ

高校2年の5月という、かなり中途半端な時期に、家の事情で千歳  
が転入することとなったこの学校は、昨年できたばかりの全寮制の  
高校だ。

この高校には、変わった生徒会の仕組みがある。

通常、生徒会といえば、生徒会長、副会長、書記、会計などの役職  
があり、少なくとも5人ほどのメンバーで形成されるものである。  
しかし、この学校では役職の設定がなく、人数はたったの3人。  
通称、ほととぎす会。

千石高校の“千石”が“戦国”と同じ響きだということから連想さ  
れたのか、生徒会メンバーは、信長、秀吉、家康という、戦国時代  
を代表する武将の名前で呼ばれる。

3人の武将の性質を表した、

鳴かぬなら殺してしまえホトトギス

鳴かぬなら鳴かせてみせようホトトギス

鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス

という句に擬えて、  
なぞら  
ほととぎす会と呼ばれるようになったのだとい  
う。

学校の第1期生にあたる昨年の入学生の中から、理事長が独断と偏  
見でもって選出したほととぎす会のメンバーは、容姿端麗、頭脳明  
晰、加えて運動神経も抜群と、全員が完璧超人らしく、3人でも問  
題なく業務をこなすことが出来ているのだそうだ。

千歳は、前の学校の友人から聞いた、千石高校のそんな変わった特

徴をふと思い出していたのだが、自分のおかれている状況を考えれば、本当はそんなことをしていい場合ではない。

入寮手続きのため、今日の午前中に男子寮へと来るよう学校から言われていたのだが、時刻はすでに11時58分。

午前と呼ばれる時間帯は、残り2分で終わりを迎える。

学校付近の男子寮を目指していたばすなのだが、どこかで道を間違えたらしく、校舎の方に辿り着いてしまった。

千歳としては地図通りに進んできたつもりなので、一体どこで間違えたのか見当がつかない。

そもそも、めったにないくらいの方角音痴である千歳が、地図だけを頼りに、たとえ目的地とは違っても、それに近い場所にたどり着けたことは、決して大げさではなく奇跡に近いことなのだ。

学校案内のパンフレットには、寮から学校までは徒歩10分と表記されていたため、ここからそう離れてはいないのだろうが、下手に動きまわると、今度はとんでもない場所に着いてしまう可能性がある……

というよりも、そうなることが確実だ。

誰かに男子寮までの道を尋ねようにも、今日は日曜日。見える範囲に、人影はない。

「…ま、いいか。」

千歳は、持ち前のマイペースさを惜しむことなく発揮して、焦りなど微塵も感じられない声でそう呟くと、校舎に向かってゆっくりと足を踏み出した。

日曜とはいえ、部活動で登校している生徒がいる可能性はある。

しばらく歩いていけば、そのうち誰かに出会えるかもしれない。

校門から校舎へと続く道の両脇には、背の高い木が並んで植えられている。

木々の間から差し込む日光が心地良くて、何だか眠たくなりそうだと、迷子の身にしてはずいぶん呑気なことを考えながら千歳が歩いていると、

「<sup>くぬぎ</sup>柵!! そっちに行つたぞ! 逃がすな!」

「任せろ!!」

二つの声が聞こえた直後、木々の間から青い火の玉のような物体が飛び出してきた。

その青い物体を追って、声の主と思われる二人の青年が姿を表す。

「ッ!? 何で結界の中に一般人がいるんだ!？」

「俺が知るか!とにかく、先にそれを回収しろ!」

「はいはい。了解。」

千歳を見て、二人の青年はずいぶん驚いた表情をしていたが、青年の一人が叫んだのを合図に、もう一人が青い物体に向かって手を伸ばした。

空中を漂っていた青い物体は、あっさりと捕まり、青年がはめていた指輪に吸い込まれていく。

「回収完了つと。で、どうするよ、<sup>かえで</sup>楓?」

「めんどろなことになるな。何で一般人がここに入つてこられたんだ:。」

“楓”と呼ばれた青年は、180?は越えるであろう長身で、細身ではあるが華奢という程ではなく、バランスのとれた理想的な体型。切れ長の目にかけられた細いフレームの眼鏡がとても良く似合っており、知的な美青年といった感じだ。

もう一人の、青い物体を回収した人物:さきほどの二人のやりとりからして、おそらく名前は<sup>くぬぎ</sup>柵というのだろう。

柵は、楓と同じくらいの長身。何かスポーツをしているのか、しなやかな筋肉がついた引き締まった体をしており、肌は健康的な小麦色だ。野性的な雰囲気漂う、楓とは違ったタイプの美青年である。

「:もしかして、こいつが例の候補者じゃないのか?」

「ああ! といえば、<sup>かなう</sup>叶が、次の候補が近々転入してくるとか言つてたなあ。結界内に入つてこれたのも、候補者ってことなら納得できるし。それにしてもこいつの見た目:叶のストライクゾーンと真ん中って感じだな。」

千歳が楓と柵のことを観察していた間、二人も千歳のことを観察していたらしい。

その結果、二人は何やら納得のいく結論に辿り着いたようだが、千歳には、二人の話の内容が全く理解できない。

「えーっと、お前、もしかして転入生？」

柵からの質問に、千歳は二人に視線を合わせると黙ってうなずいた。千歳の身長は170？ほどのため、自然と見上げる形になるのが少し悔しい。

「…さっきから思ってたんだけど、お前、この状況で何か言いたいこととかないのか？ずっと黙って、逃げるでもなく大人しくしてると、ぼーっとして無表情だし。普通、もっと驚いてギャーギャー騒ぐだろ。あの火の玉みたいのは何だったんだー！？とか、お前ら何者だー！？とか。」

「騒いでほしいの？」

「いや、そういうわけじゃねーけど。」

別に、言いたいことがないわけではなかった。むしろ、たくさんあった。

柵が例に出した二つも含め、叶って誰なのかとか、候補って何なんだとか。

しかし…

「男子寮って、ここからどうやって行けばいいの？」

「もっと他に聞くことがあるだろう！！何でこの状況で最初の質問がそれになる！？」

状況にそぐわない、間の抜けた千歳の言葉に、柵が全力で突っ込んだ。

「いろいろ有りすぎて何か面倒になったから…まあ、17年も生きてれば、不思議体験の一つや二つもあるだろうってことで片付けようかと思って。とりあえず、俺が今一番知りたいのは、男子寮への行き方。」

決して、好奇心旺盛とはいえない性格の千歳といえども、青い火の

玉のような物体や、それを追いかけて現れた二人の青年には、かなり興味を持った。誰だって、いきなり不思議な火の玉が飛んできて、しかもそれが指輪の中に吸い込まれていくなんて非日常的な光景を目にすれば、関心を示すことだろう。

しかし、知りたいという気持ちと、それを知るための労力を天秤にかけると、まあ知らなくてもいいかという結論に至ってしまったのである。

17年間、日常生活の中で貫き通されてきた千歳のマイペースさは、非日常的な事態においても揺らぐことはなかった。

「うわー！！お前面白いなあ。楓、俺たち、長い人生のうちに何度かは体験するであろう不思議体験の一つってことで片付けられちゃいそうになってるけど、どうするよ？」

「どうもこうも…あれを見られた以上、このまま寮に案内するわけにはいかないだろ。叶の所に連れていく。」

端正な顔をくしゃくしゃにして、豪快な声をあげて笑っている柊には、違い、楓は千歳に冷やかな視線を送りながら、ため息交じりに答える。

「どうやら、呆れられてしまったようだ。」

「おい、お前。とりあえず、黙って俺たちに着いてきてもらおうか。」

断ることを許さないという雰囲気进行全面に押し出しつつ、そう言い放った柊に、お前じゃなくて千歳だよと返した。



## 理事長室にて。

「キヤーツ！！可愛い！完璧！まさに理想の塊かたまりツ！！もう、何この可愛い生きもの！！！！」

楓と柵に連れて来られたのは、五階建ての校舎の最上階にある理事長室だった。

室内へ入ると、真っ赤なスーツを身に付けた一人の女性が三人を出迎えた。

女性の歳は20代後半といったところで、綺麗というより、可愛いという言葉がぴったりと当てはまる。

腰まで届く真っ直ぐで艶やかな黒髪が印象的で、まるで日本人形のようにうだ。

そして今、なぜか千歳はその可愛らしい女性に、可愛いと連呼されながら抱きつかれ、床に押し倒されている。

「こちら、叶かなう。校内、しかも理事長室で初対面の男子生徒にセクハラするなー。」

「うわぁ、髪の毛細い。ふわっふわ、やわらかい。しかも、すっごい綺麗な栗色ッ。」

柵がやんわりと制止の声を掛けてくれたのだが、叶と呼ばれた女性は、それを清々しいほどきっぱりと無視。

千歳を押し倒した体勢のまま、ぎゅうぎゅうと背中に巻き付けられていた腕を解いて、今度は髪を撫でている。

「ほっぺもすべすべ、真っ白で肌理が細かくって…。髪と同じ、色素の薄い栗色の大きな瞳ッ、俯くと影が出来そうな長い睫毛ッ、桜色の唇ッ！あ、もうッ。ほんっつとに可愛い！！」

髪を撫でていた手を、頬へと移動させ、かなりの至近距離で千歳の顔をうっとり眺めていた叶が、さらに顔を近づけてきた。

あと数センチで唇同士がぶつかる…というタイミングで、柵が、まるで猫でも運ぶように叶の首根っこをつかんで千歳から引き剥がす。

「はい、そこまで。叶、しょっぱなから暴走しすぎ。てゆうか、転校生もちょっとは嫌がれよ？好きにさせとくと、この人何するかわかんないぞー。ああ、それとも嫌じゃなかったとか？」

「嫌じゃなくはない。でも、我慢できないほどでもない。」  
「からかうように櫛に言われた言葉に対し、千歳は相変わらずのぼーっとした顔で淡々と答える。」

「うわあー、やっぱお前面白い、てゆうか変わってるなあ。」

「あらあら。千歳君は、ちょっと不思議ちゃんなのかしら？でも、そこがまた魅力的ッ！無気力そうな顔最高ッ！」

「：ふざけてないでさっさと本題に入れ。」

理事長室に入って数分、楓は、自分以外の三人のやりとりを黙って見ていたのだが、いいかげんしびれを切らしい。

機嫌が悪い事を隠そうとしない、冷たい声が室内に響いた。こちらに送られる視線は、声よりさらに冷たい。

「えーっと、それでは改めまして。千石高校へようこそ、友江千歳君。私は、この学校の理事長の叶です。叶ちゃんって呼んでね。」

千歳のなかでは、理事長というもつと年輩な人間が務めているという印象があったので、ずいぶん若い理事長なんだな、というか、初対面の生徒をいきなり押し倒す人間が理事長を務める高校って大丈夫なんだろうか、ぼんやりと考える。

「でもって、こっちの、さっきからご機嫌斜めな眼鏡を掛けた知的美青年が樟竜楓、こっちの、ワイルドな雰囲気漂う美青年が樟竜櫛、どっちも素敵な男の子でしょ？二人は、従兄弟で、どっちも千歳君と同じ二年生よ。」

叶は、自分の両脇に立つ楓と櫛をそれぞれ手で指し示しながら満面の笑顔で紹介を続けていく。

「ちなみに、うちの学校の生徒会がほととぎす会って呼ばれてて、ちょっと変わったシステムなのは知ってるわよね？まあ、念のため簡単に説明すると、メンバーは“信長”“秀吉”“家康”の三人で構成されてまーす。そしてそしてえ、二人がそのほととぎす会のメ

ンバーで、楓が信長、櫛は秀吉。」

なるほど、これが噂のほととぎす会かと、千歳は改めて楓と櫛へと視線を送る。

確かに、容姿は二人とも文句なしに優れている。この見た目で運動も勉強もできるとなれば、完璧超人と呼ばれるのもうなずける。

きつと、ほととぎす会の残りのメンバーである、ここには居ない“家康”も、いろいろと優れた人物なのだろう。

「さて、紹介はこれくらいにして、千歳君がさっき見た出来事…あの青い物体は何だったのか、二人が何故あれを追いかけていたのかの説明にはいりましょうか。」

長くなるから座って話しましょうとの叶の勧めにしたがい、テーブルを囲うようにして、部屋の中央に四つ置かれたソファへそれぞれ腰かけた。

千歳のちょうど正面に叶が座っており、前を向くとぴたりと視線が重なる。

「まずはじめに、これから話すことはフィクションじゃないから。ちよおおっと信じにくい内容だと思うけど、冗談じゃなくて全部事実だからそのつもりで聞いてね。了解？」

叶は、相変わらず満面の笑みを浮かべているのだが、明らかにさっきまでと雰囲気が違う。

笑顔の中にも何か迫力があり、場に不思議な緊張感が漂う。

「了解。」

「よろしいッ。」

千歳の答えに満足したのか、叶はさっきまでのただ明るいだけの笑顔に戻ると、本格的に説明を開始した。

「じゃあ、まず質問。千歳君は、人は死んだらどうなると思う？」

「どうって…どうもならないと思う。死んだら…死んでお終いでしよう？」

「それが、お終いじゃないのよねえ。これからするのは、死んだ後の世界のお話。」

「それって、天国とか地獄とか？」

「うーん、近いけどチョット違うわね。人は、死んだら魂だけが体から抜け落ちて、黄泉の国に旅立つの。で、そこで閻魔大王様の魂の審判を受ける。でも、その審判で決めるのは、天国に行くか地獄に行くかってことじゃなくて、来世のこと…つまり、その魂が、次にいつどんな姿で生まれ変わるかってこと。」

これを決めるのがかなり大変なのよねーと、叶は、まるで自分がその審判を行っているかのような良い様だ。

「でも、一言で魂っていつでもいろいろあってね。死んだあとすぐに審判を受けて、一瞬で生まれ変わる魂もあれば、審判を受けても、その結果が出るまでに何百年って時間がかかる魂があったり、そもそも審判を受けられるまでに、すごい時間がかかる魂があったり。」

「死んだ順に生まれ変わるわけじゃないんだ？」

「そうだったら分かりやすいんだけどねー。残念ながら、そんな簡単にはいかないのよ。原因は、これまたいろいろあるんだけど。例えば、この世への未練が強い魂は、基本的にその未練というか、この世への執着？みたいなのが落ち着くまでは、不安定で審判を受けられないとか。歴史に名前が残るような、偉業を成し遂げた人なんかは、魂もやっぱり普通の人のものとは違って特殊なことが多くて、生まれ変わる時も、それだけの魂の容量を受け入れられる器が必要になってくるから、審判の結果がなかなか出なかったりするし。で、いろんな理由でなかなか生まれ変わらない魂たちは、閻魔大王様の管理下で、大切に大切に保管されてるってわけ。ずらずら説明を続けちゃってるけど、ここまでで何か質問は？」

「うーん…特にはない。」

というか、話の内容が未知の領域すぎて、何を聞いていいのかが分からない。

「じゃあ続きー。さっき、魂にはいろいろあるって言ったけど、大きくは、善魂ぜんだまと悪魂あくだまの二つに分けられるの。この悪魂ってゆうのがねー、黄泉の国に行くのを拒否して、死んだ後もこの世に留まり続

けようとする困ったちゃんなのよ。生きてる人間の体を魂ごと無理やり乗っ取っちゃうから、魂を管理してる閻魔大王としては大問題。」

説明が続くにつれ、話がどんどん現実から遠ざかっていく。

死んだ人間の魂が、別の人間を乗っ取るなどという話、たいいていの人間は、からかわれていると思ってまともに聞きはしないだろう。

叶もそれが分かっているから、最初にこれから話すことは全て事実だと念押ししたのだ。

もつとも、いくら念押しされたところで、内容が内容だ。

やはり全て信じろというには難しい話だと思う。

しかし、千歳は今日、現実とは思えない不思議なもの：空飛ぶ青い物体を、柵が指輪の中へ吸い込むという光景を実際に目になっている。叶は、あの青い物体について説明するといって話を始めた。

これまでの話から考えると、おそらくあれが：

「もしかして、俺がさっき見たあの青い火の玉みたいなのが、その悪魂？」

「大正解ッ！千歳君にはくしゅ。」

「ぼーっとしてるから抜けてる奴なのかと思えば、お前意外とするどいなー。」

叶と共に、パチパチと手を叩きながら、柵が褒めているのか、馬鹿にしているのかよく分からない言葉をはさむ。

楓はと言えば、相変わらず不機嫌な表情で、さっさと話を進めろという視線を叶に送っている。

「悪魂は、閻魔大王様に仕える補佐が捕まえて、強制的に黄泉の国に連れてくことで処理してたんだけど、ここ数年、何故か急増しちゃってねー。原因は分からないは、悪魂は増える一方だはで、処理しきれなくなっちゃったのよ。人間に取り憑いた悪魂は、時間が経てば経つほど、その人間の魂を吸収して凶悪化しちゃうし、魂を全部吸い取られちゃった人間は死んじゃうしで、不のスパイラルまっしぐら。」

困ったわーと呟きながら両手で頭を抱え込むと、叶は大げさにテールに突っ伏し、数秒間の沈黙が流れる。

突っ伏した状態のまま、無言でチラチラとこちらに送られてくる叶の視線は、千歳に何らかの反応を求めていることが明白なのだが、どんな反応を返せばいいのか思い浮かばなかったので、あたりさわりのないように、一言、大変だねと言葉にした。

「そうッ！ そうなのッ！ 大変なのよ！ そこで、何とか状況を打破すべく思考を重ねて、遂に一つの素晴らしい対策を思いつきましたッ！ さて、いきなりですがここからは、分かりやすいように人形劇形式で説明したいと思いますッ。」

千歳の一言に、いきなり勢いを取り戻した叶は、顔をあげ、高らかにそう宣言すると、何やらごそごそと準備をはじめた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6745t/>

---

ほととぎす会

2011年10月8日23時57分発行